

萱振遺跡 II

2005年12月

大阪府教育委員会

萱振遺跡Ⅱ

2005年12月

大阪府教育委員会

はしがき

河内平野の地中には未だに知られていない数多くの遺跡が埋もれています。その実態が明らかになりだしたのは、1976年から10年あまりにわたって実施された近畿自動車道天理～吹田線の発掘調査以来のことであり、以後、河内平野では続々と新しい遺跡が発見されました。今回報告する萱振遺跡もそんな遺跡のひとつです。

萱振遺跡は河内平野南部の八尾市内に所在する遺跡です。府立八尾北高等学校建設に先立つ発掘調査で弥生時代後期から中世にいたる集落跡や、古墳時代前期に属する埋没古墳、自然河川の跡などが発見されました。特に萱振一号墳と名付けられた古墳は、河内地域の低地部では最大級の古墳であり、古墳を飾った多彩な形象埴輪とともに貴重な資料です。また古墳とともに弥生時代後期を主体とする集落跡も発見されました。この集落は全て掘立柱建物で構成される特徴のある集落です。

今回の報告する調査地点は萱振一号墳の北側で、八尾北高校の校舎新築の敷地にあたります。以前の調査で発見された遺構群の続きを検出されることから、発掘調査を行いました。調査の結果、弥生時代後期を主体とする集落の縁辺部が検出され、萱振遺跡の様相が一層くわしく判明することになりました。

報告にあたり、調査の実施に協力していただいた地元の方々をはじめ、関係各位に感謝申し上げます。

平成17年12月

大阪府教育委員会

文化財保護課

課長 丹上務

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市萱振7丁目42番地における萱振遺跡の発掘調査報告書である。
発掘調査は、府立八尾北高等学校の校舎建設に伴う事前調査として実施した。
2. 発掘調査は大阪府教育委員会高校改革課から依頼を受け、文化財保護課が実施した。
調査に要した経費は大阪府教育委員会が負担した。
3. 現地調査は2003年8月20日から2004年3月15日までの間、文化財保護課 調査第一グループ
技師 横田 明が担当した。調査番号は03026である。
4. 遺物整理は2004年4月1日から2005年3月31日までの間、横田および調査管理グループ 技
師 林日佐子、藤田道子が実施した。
5. 作図は基本的に航空測量により行ったが、手実測による記録作成も隨時行った。写真測量で
は1/20または1/50と1/100の縮尺で作図を行った。
6. 写真測量については株式会社航空撮影センターに委託した。撮影フィルムについては株式会
社航空撮影センターにおいて保管している。調査現場での遺構や土層などの写真撮影について
は調査担当者が行った。
7. 本書に掲載した遺物写真の撮影については、有限会社阿南写真工房に委託した。
8. 本書の執筆・編集は横田明が行った。
9. 出土遺物および図面・写真等は大阪府教育委員会文化財調査事務所において保管している。
10. この報告書は300部作成し、一部あたりの単価は945円である。

凡　　例

1. 本報告書のレベルは全てT.P.（東京湾平均海水面）で表示している。
2. 方位は国土座標第VI座標系の座標北を示し、座標の数値は全て旧座標の数値である。ちなみに、旧座標（日本測地系）と新座標（世界測地系）との関係について、調査区内および調査区周辺に関する数値をいくつかあげておく。

旧座標 ($X = -150,770,000$ $Y = -36,080,000$)

→新座標 ($X = -150,423,1849$ $Y = -36,341,2162$)

旧座標 ($X = -150,780,000$ $Y = -36,090,000$)

→新座標 ($X = -150,433,1850$ $Y = -36,351,2164$)

3. 写真図版中の遺物番号は挿図と対応している。

目 次

はしがき

例言

凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の方法	2
第3章 調査の成果	4
第4章 まとめ	28

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 調査区地区割図	3
第4図 調査区土層断面図	5
第5図 第1面遺構配置図・主要遺構断面図	7
第6図 第1・2面上面遺構内出土遺物	8
第7図 第2層上層出土遺物	8
第8図 第2面上面遺構配置図・主要遺構断面図	9
第9図 第2面下面遺構配置図・主要遺構断面図	11
第10図 第2層下層出土遺物（1）	12
第11図 第2層下層出土遺物（2）	13
第12図 溝—2053遺物出土状況（1）	14
第13図 溝—2053遺物出土状況（2）	15
第14図 溝—2059遺物出土状況	16
第15図 土坑—2001・2051遺物出土状況	17
第16図 第2面下面遺構内出土遺物（1）	18
第17図 第2面下面遺構内出土遺物（2）	19
第18図 第2面下面遺構内出土遺物（3）	20
第19図 第3面遺構配置図	21
第20図 第3層出土遺物（1）	22
第21図 第3層出土遺物（2）	23
第22図 竪穴住居—2100平面図・断面図	23
第23図 第3面遺構内出土遺物	24

第24図 第4面遺構配置図・主要遺構断面図	25
第25図 第5面遺構配置図	27

写 真 目 次

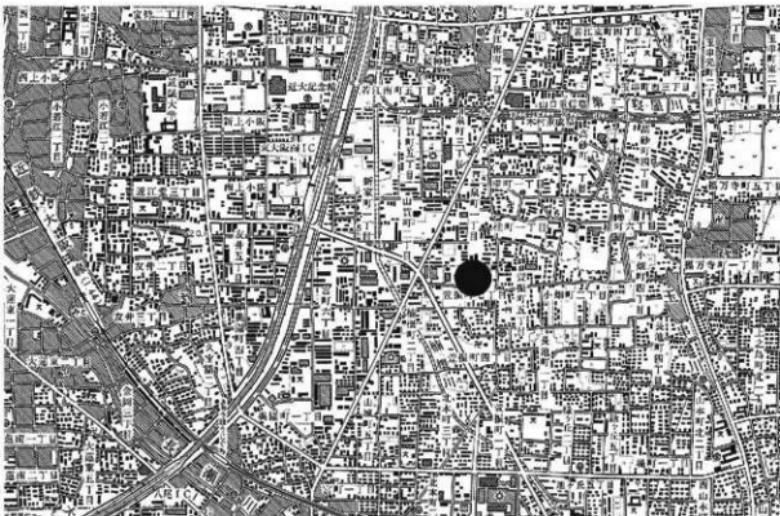
- 図版1 第1面全景（東から） 第2面上面全景（東から）
- 図版2 第2面下面垂直写真 第2面下面全景（東から）
- 図版3 第2面下面西部（東から） 第2面下面南西部（南から）
- 図版4 第2面下面溝—2053検出状況（南から） 第2面下面土坑—2051検出状況（南から）
- 図版5 第2面下面土坑—2001半掘状況（南から） 第2面下面土坑2001完掘状況（南から）
- 図版6 第3面垂直写真 第3面西部（南から）
- 図版7 第3面竪穴住居—2100検出状況 第3面南西部（南西から）
- 図版8 第4面垂直写真 第4面全景（南から）
- 図版9 第4面全景（東から） 第4面南西部（南から）
- 図版10 遺物（1）
- 図版11 遺物（2）
- 図版12 遺物（3）
- 図版13 遺物（4）
- 図版14 遺物（5）
- 図版15 遺物（6）
- 図版16 遺物（7）

第1章 調査に至る経過

萱振遺跡は八尾市域北西部に広がる遺跡である。1982年からの府営住宅関連の調査を大阪府教育委員会が手がけて以降、民間事業や八尾市立中学校の建設などに関連して、八尾市教育委員会や（財）八尾市文化財調査研究会などが順次調査を進めてきた。

今回の調査対象地である府立八尾北高校は萱振遺跡範囲内でも北部に所在する。八尾北高校は1980年度の高校大量増設に伴って建築された高校であり、1983年以降87年まで学校敷地の用地買収の進展に伴い、調査区を拡大する形で発掘調査を実施した。その結果、萱振1号墳と命名された方墳、弥生時代後期の集落跡、古墳時代の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物群など、多彩な遺構、遺物が検出された。特に、萱振一号墳は、河内低地部で最大級の方墳であり、墳丘の周囲からは円筒埴輪以外に多彩な形象埴輪が出土している。その内でも翫形埴輪は直弧文で飾ったうえに赤く彩色した優品である。その後、大阪府文化財保護条例によって萱振1号墳は史跡に、翫形埴輪は考古資料に指定されている。

近年来の府立高校再編の流れの中で、八尾北高校では2003年に総合学科が開設された。2005年を目処に実習棟が建設されることとなった。今回の調査地は1次調査の対象地、萱振一号墳の北側にあたる。文化財保護課と高校改革課で協議を行った結果、弥生～古墳時代の遺構が検出されるのは確実なことから実習棟建設予定地内で発掘調査をすることとなった。現地調査は2003年8月20日から開始し、2004年3月15日には全ての現地作業を終了、現場を撤収した。



第1図 調査位置図 (縮尺 1:25,000)

第2章 調査の方法

地区割

遺跡の位置については國土座標第VI座標系（日本測地系）を利用して表示している。萱振遺跡調査で使用した地区割については、過去の調査成果との整合のため、高校建設時の調査（1次調査）で設定した地区割りを踏襲して使用することとした。この地区割りは、調査対象地域での遺物取り上げなどの単位として5m包含を設定するためのものである。原点をX = -150,950 Y = -35,850という任意のラインに設定して、そこから北へAB、AC・・・BA、BB・・BWと順次記号をつけて、西へは01、02、03、04などと順番に付した。各地区はBA・54などのように縦・横の番号の組み合わせで表示することを原則とするものとした。今回の調査区は1次調査のA区・B区の北側にあたり、南北方向にはBJ～BO、東西方向には44～50付近に相当する。

方位

地区割と同様に國土座標第VI座標系（日本測地系）に基づいて座標北で表示することとした。遺跡周辺の座標北は、今回の調査の際には磁北より東へ6°27'、真北よりも西へ13'振れていた。

遺構面

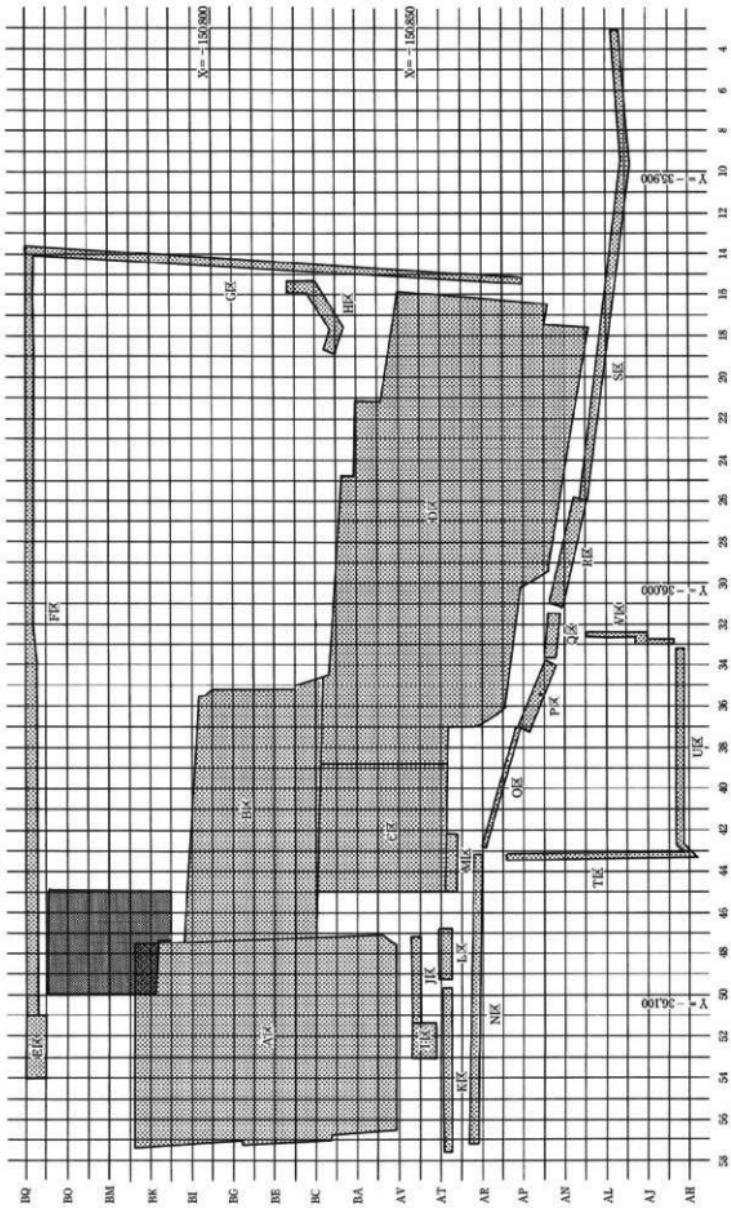
遺構面の呼称については、第1層上面の遺構群を第1面、第2層上面の遺構群を第2面上面、第3層上面の遺構群を第3面などと呼称することとした。

遺構番号

調査区からは多種多様な性格の遺構が検出される。それで遺構番号については、遺構の種類に関わらず4桁の通し数字を振り、数字の前に溝、土坑などと遺構の種別を付することとした。つまり遺構の種別に関わらず、同じ番号の遺構は存在しないということである。



第2図 調査区位置図 (縮尺 1:2,500)



第3图 滇池区地区剖面图

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

今回の調査区内の土層は近年の盛り土層が厚さ1m以上にもおよび、その下から高校造成以前の耕作地の土があらわれる。しかし盛り土より下の土層については、中世以降の耕作地の造作などにより微妙に削平を受けていることから、調査区全域で必ずしも一定しているわけではない。以下、調査の過程で認識したポイントとなる土層について簡略に記述した。(第4図)

第0層 すべて機械力により除去した。土層断面図には直接的にはあらわれてはいないが、高校建設時の用地造成に利用された盛り土層であり、層厚は約1mである。上面はテニスコートの関係などにより、平坦にならされており、水準高はおよそT.P.+5.4~5.5mである。

第1層 高校用地造成以前の耕作地の耕作土層であり、暗黄灰色土を主体とする層である。削平を受けているのか、部分的に残っているのみである。調査区内では西側よりも東側でよく残っている。水準高はT.P.+4.5~5.0mである。

第2層上層 青緑褐色のシルトや淡灰黒色粘質土が主体となる土層である。包含遺物は少ないものの、人面墨書き器など奈良時代の遺物も出土している。水準高はT.P.+4.6m前後で、この層の上面では中世に属する第1面の遺構群が形成されている。

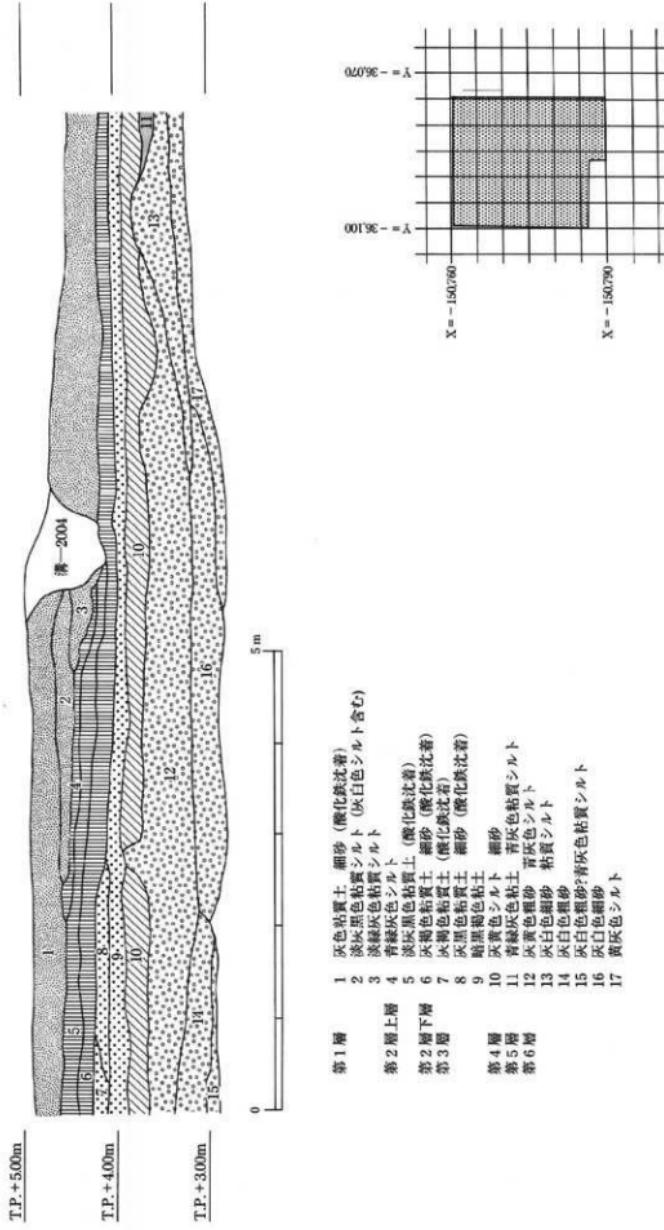
第2層下層 灰白~褐灰色の砂やシルトを主体とする土層であり、削平を受けているのか上面は平坦ではなく凹凸が見られる。水準高は約T.P.+4.4m前後で、弥生時代の内でもV様式を中心とする遺物を含んでいる。この層の上面は第2面上面の遺構群となっており、おおむね奈良時代~中世の遺構群と推測される。

第3層 黒~褐色の砂層や粘土層を主体とする土層であり、上面の水準高はおよそT.P.+4.2mである。本来は弥生時代後期の流路の氾濫によりあふれ出た土砂の堆積土層である、後世の削平を受けているのか上面は一定していない。層中には弥生V様式を中心とする弥生時代の土器などの遺物を包含しており、上面には第2面下面の遺構群が形成されている。同じ第3層においても上部は灰褐色粘質土であるが、下部は灰色系統の粘土や砂を主体とする土層となっている。下層の第4層が南西から北東に傾斜気味に堆積していることも影響して、北側の堆積が若干厚くなる傾向がある。

第4層 青緑灰~灰黄色のシルトや砂を主体とする土層である。水準高T.P.+3.9~4.0mで水平方向に堆積している。層中には遺物はほとんど含んでいないものの、上層遺構面との関係から、少なくとも弥生時代後期以前に堆積した土層であると推測される。この層の上面で第3面が形成されている。なお、この層以下はまったく遺物を含まない堆積層になる。

第5層 灰オリーブ色の粘土やシルトが主体となる土層であり、水準高T.P.+3.8mである。この土層よりも下の土層は基本的に水平方向の堆積をしており、下の第6層とも極めて近似した土質

第4図 調査区土層断面図



になっている。また、この層の上面が第4面である。

第6層 灰～オリーブ色の粘土層を中心の土層で、水準高はT.P.+3.4mである。水平方向に堆積しており、土質も均質な無遺物層である。この層の上面で調査区の北東および南西の隅で流路を検出している。流路は内部の砂の堆積から見ると南東から北西の方向に流れているようであるが、遺物はまったく含んでいない。

第7層 黒いベルト状態に見える土層であり、黒色のシルト混じりの粘土層である。水準高はT.P.+3.0mであり、層厚は10～20cmである。弥生時代前期相当の堆積層と思われる。

第2節 遺構と遺物

各遺構面においてさまざまな遺構を検出した。溝、土坑、ピット、堅穴住居などがある。検出した遺構について、以下、遺構面毎に論述する。

(1) 第1面

第2層上層の上面に形成された遺構面で、第1層に被覆されている。基準高はT.P.+4.5～4.7mである。この遺構面を構成する遺構としては、土坑、東西方向、南北方向の耕作溝および、東南から北西方向に流れる自然流路（流路—1017）などが確認されている。この自然流路は調査区の東南から北側中央にむいて流れる広くて浅いものであるが、この流路を境に東側と西側の耕作溝の様相が異なっている。流路よりも西側は南北方向の耕作溝が主体になるが、東側は東西方向の耕作溝が主体となる。この流路がなんらかの形で耕作地の境界の役割をしていた可能性もある。

溝—1003 調査区西側にある南北方向の溝である。幅70～100cm、深さは5～10cmで、埋土は灰色褐色粘土である。

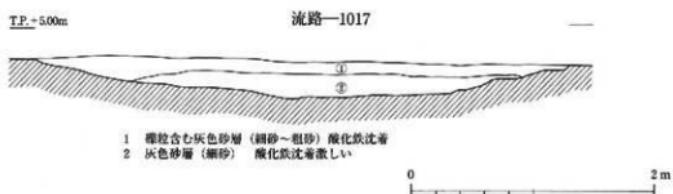
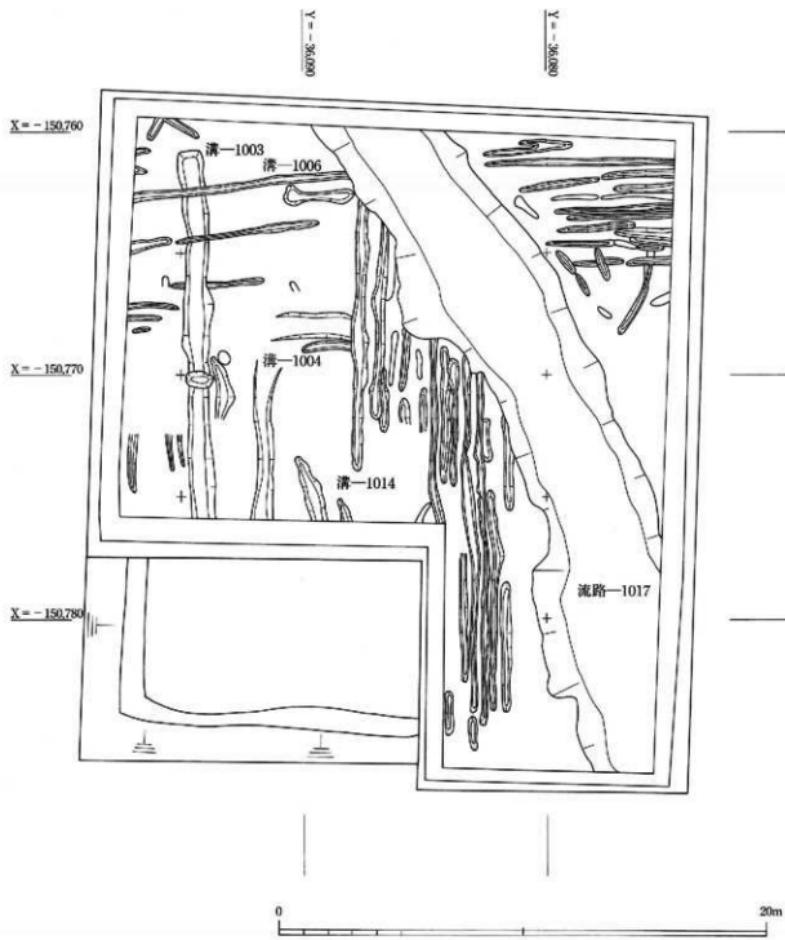
溝—1004 溝—1003のすぐ東側に所在する南北方向の溝である。幅は50～70cm、深さは5～10cmである。

溝—1006 調査区北西部において検出された東西方向の溝である。幅20～30cmで、深さは5～10cmである。

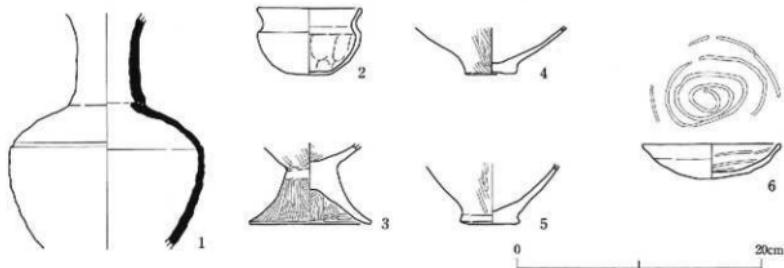
溝—1014 調査区中央部において検出された南北方向の溝である。幅40～70cmで、深さは10cmである。

調査区中央部南北溝群 調査区中央部の流路—1017より南側で検出された、細長くて南北方向にのびる小溝群である。20～30cm位の間隔を置ながら10本以上の小溝が並んでいる。幅20～30cmで、深さは10～20cm、埋土は灰色褐色粘土である。条里との方向とも重なるものであり、耕作に伴う溝の痕跡と思われる。

流路—1017 調査区を東南から北側中央にむけて流れるものであり自然流路と推測される。東西幅は4.5～5.0mであり、深さは20～30cm前後である。流路内の埋土は灰色粗砂層が主体でかたくしまっており、溝底面には酸化鉄が沈着している。出土遺物は多くはないが、奈良時代の須恵器壺や土師器の破片などが出土している。



第5図 第1面造構配置図・主要造構断面図



第6図 第1・2面上面遺構内出土遺物
流路-1017(1~2) 溝-2004(3~5) 溝-2003(6)

出土遺物は第6図1~2であり、1は須恵器壺であり口縁と底部が欠けている。2は土師器の小型壺である。

調査区北東部東西溝群 調査区内でも北東部に広がる東西方向の小溝群である。20~30cmの間隔をおきながら10条程度の小溝が並んでいる。溝はそれぞれ幅20~30cmくらいであり、

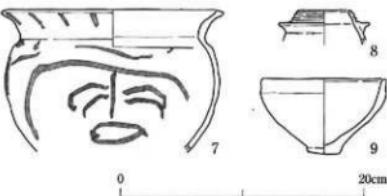
内部には灰褐色粘土が堆積している。遺物は破片ながら瓦器など中世遺物を含んでいる。これも条里の方向と合うものであり、耕作に伴う溝の痕跡と思われる。

(2) 第2面上面

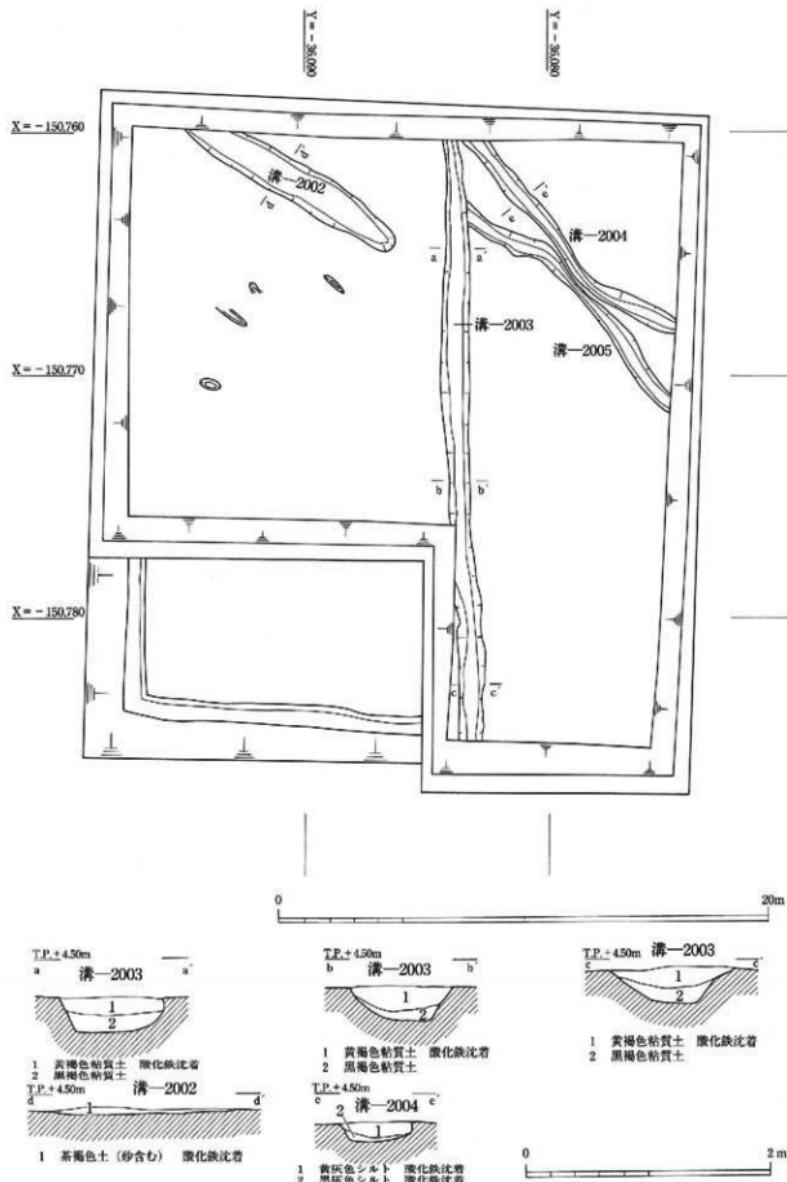
第2層下層の上面に形成された遺構群であり、およそ基準高T.P.+4.3~4.5mである。極めて平坦な面となっているが、遺構は散漫であり、種類としては溝が主体である。これより上面にあたる第1面は東西方向、南北方向にのびる溝が主体で、条里区画にのる溝が大部分であったが、第2面上面では溝-2003のように南北方向のものと、それとは違って斜め方向にのびるものがある。層位的には第1遺構面には先行するものの、遺物から14世紀を前後するくらいの時期の遺構群と思われる。

第2層上層出土遺物 (第8図7~9) 第2層上層は第2面上面を被覆している土層である。この土層から出土した遺物は量的には少ないが、中世遺物を主体としながらも弥生土器や奈良時代の墨書き人面土器も出土している。7は土師器壺であり体部に人面墨書きがある。土器自体は1/3程度の残存状況であるが、体部の人面墨書き部分はあらかじめ残っている。簡単な線だけで描寫されたものであるが、笑っているようなユーモラスな表情のものであり、どことなくおかしみがある雰囲気が漂っている。8はミニチュアの瓦製羽釜であり口縁部分のみが残存している。9は弥生土器の鉢である。

溝-2002 調査区西北部にある溝状遺構である。幅は140cmをはかるが、深さは5~10cm程度の



第7図 第2層上層出土遺物



第8図 第2面上面遺構配置図・主要遺構断面図

浅い溝である。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は細片ばかりであるが、弥生土器が主体に出土している。

溝—2003 調査区中央部にある溝で南北方向に伸びるものである。幅60~100cmで、深さ30~35cmであり、埋土は上・下2層に分けられ、上層は黄褐色粘質土、下層は黒褐色砂質土が主体であり、上層は酸化鉄の沈着がみられる。溝内からは瓦質羽釜の破片が出土している。

出土遺物は第6図6で瓦器椀である。器高は低く外面はほとんど横なで仕上げられており、内面には粗い螺旋状のミガキを施している。

溝—2004 調査区東北部に所在する溝である。幅50~90cmで、深さ20cm、溝内部には黒灰色シルトが堆積している。

出土遺物は第6図3~5である。高杯や壺などの小さな破片ばかりが出土している。

溝—2005 調査区東北部にある溝である。幅50~100cmで、深さは20~30cm、埋土は黒灰色シルトであり、溝—2004と平行するように並んでいる。

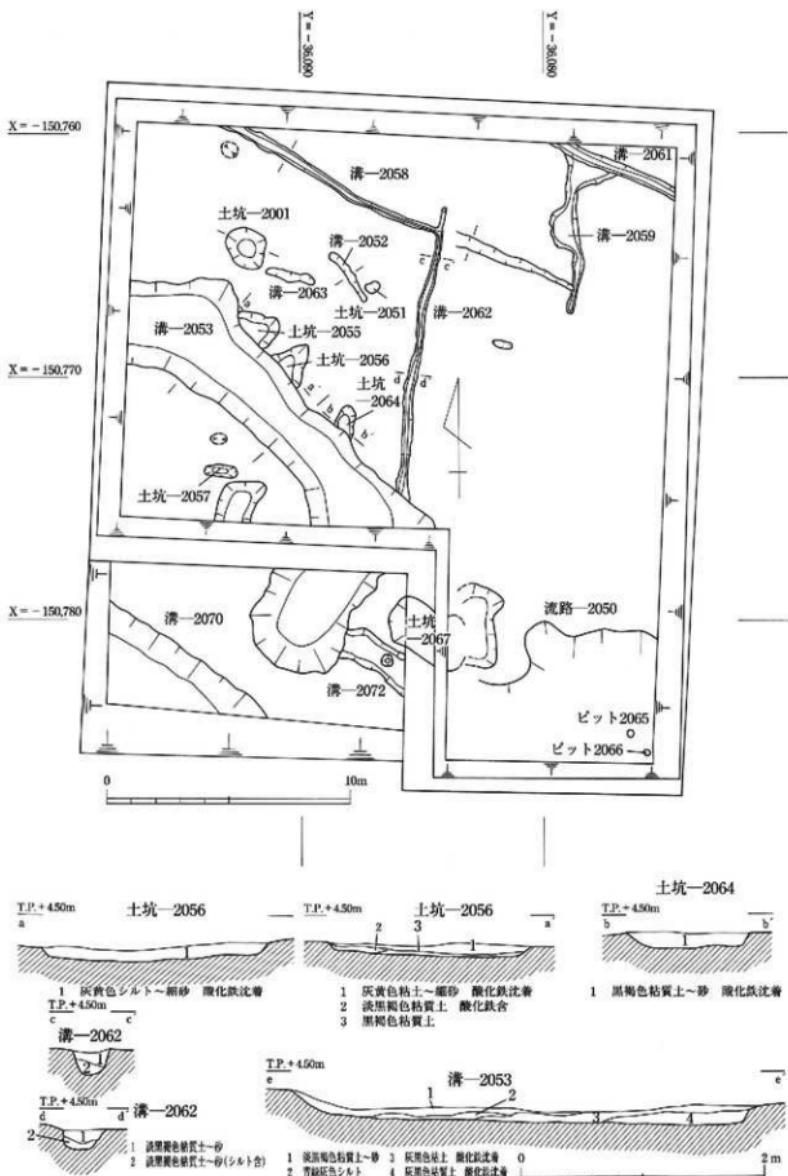
(3) 第2面下面

第3層上面に形成された遺構群であり、基準高T.P.+4.0~4.3mである。底面に壺や高杯などを配した溝（溝—2053）以外にも、遺構直上からいくつかの土器が発見されている。弥生時代後期を主体としながら一部庄内期にもおよぶ遺構群である。

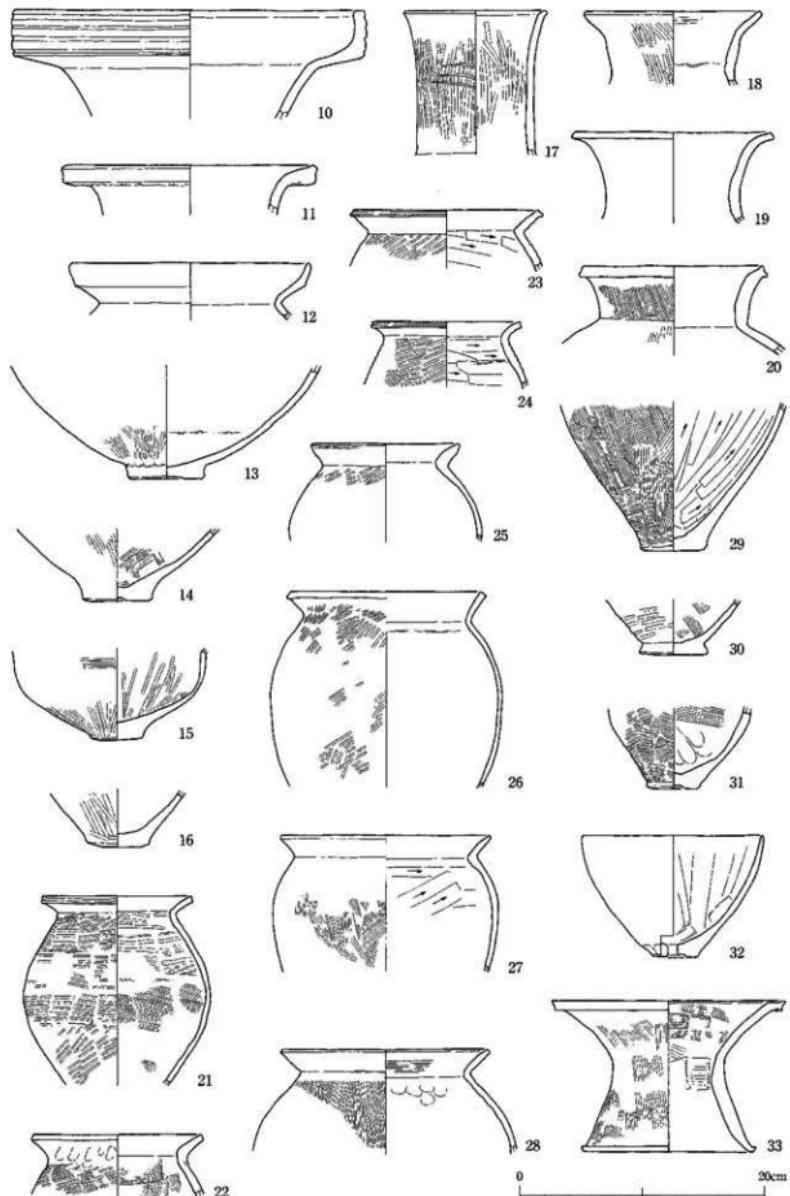
第2層下層出土遺物（第10図10~第11図47） 壺、甕、高杯、器台、椀などを主体としながら多様な器種が出土している。10~20は壺である。10は口縁部に4条の凹線文をめぐらせた二重口縁の壺である。17は長頸壺の上半部であり内外面に細かなミガキが施されている。21から31までは甕であり、比較的大きな甕と小さな甕がある。口縁部はくの字形に外反しており、胴部には水平もしくは右斜め上方向に叩きを施すものが多い。32は底部が穿孔された椀である。33は小型の器台で、外面には縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で仕上げられている。34~36は有稜高杯の杯部で34、35は口縁が外湾気味である。37~45は高杯の脚部で、故意に壊されているのか脚部だけのものが日立つ。46は手焙り形土器である。底部と胴部の屈曲部の突起上に縦方向の刻み目をめぐらしている。天井部分は欠失している。

溝—2053（第12・13図） 調査区南西端で発見された一見、長靴状の溝状遺構である。幅は2.5~3.5mで、深さは20~30cm、溝内には灰黄色~青緑灰色系統のシルトや粘土が堆積している。溝内埋土は一気に埋められたような状況ではなく、自然に堆積したような状況を示している。溝の西端付近で甕約2個体分が出土している。この溝の所在する場所は、調査区の南端をかすめるように流れる弥生時代後期の自然流路の北岸部分にあたる。本来は方形周溝状遺構であったのが、弥生時代後期の自然流路の活動により寸断されたものである可能性もあるものの断定はできない。溝の底面からは壺やカメの破片がまとまって出土している。土器の周囲や下部からはこげた木の破片が出土しており、何らかの理由で木材を燃やした後に土器を置いている可能性もある。

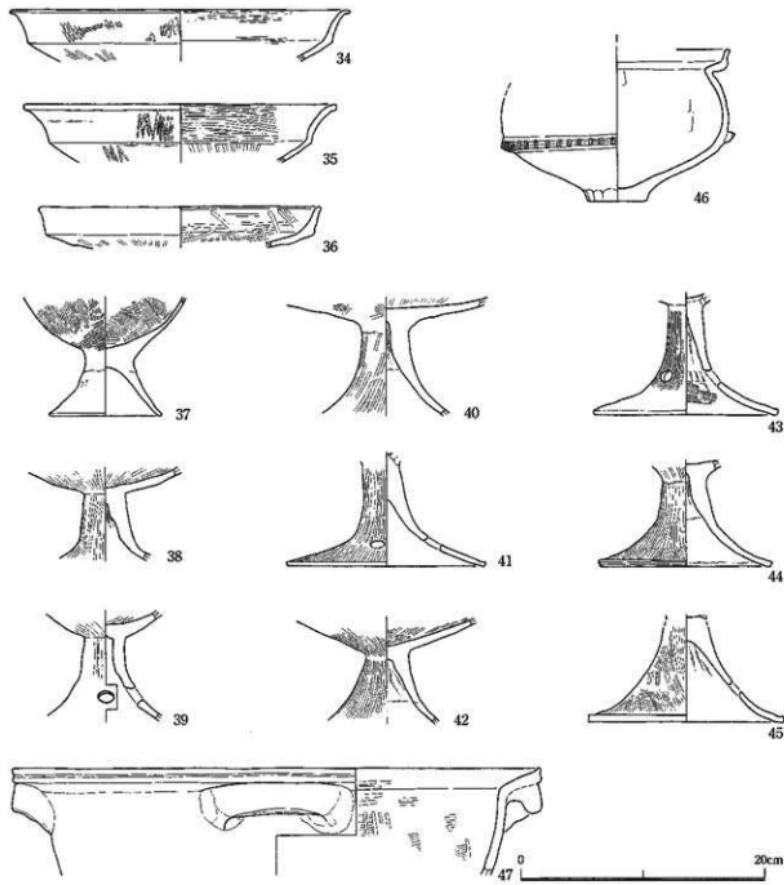
出土遺物は第16図48~第17図67である。48~49は広口壺であり、48は外面に細かい縦方向のへ



第9図 第2面下面遺構配置図・主要遺構断面図



第10図 第2層下層出土遺物（1）

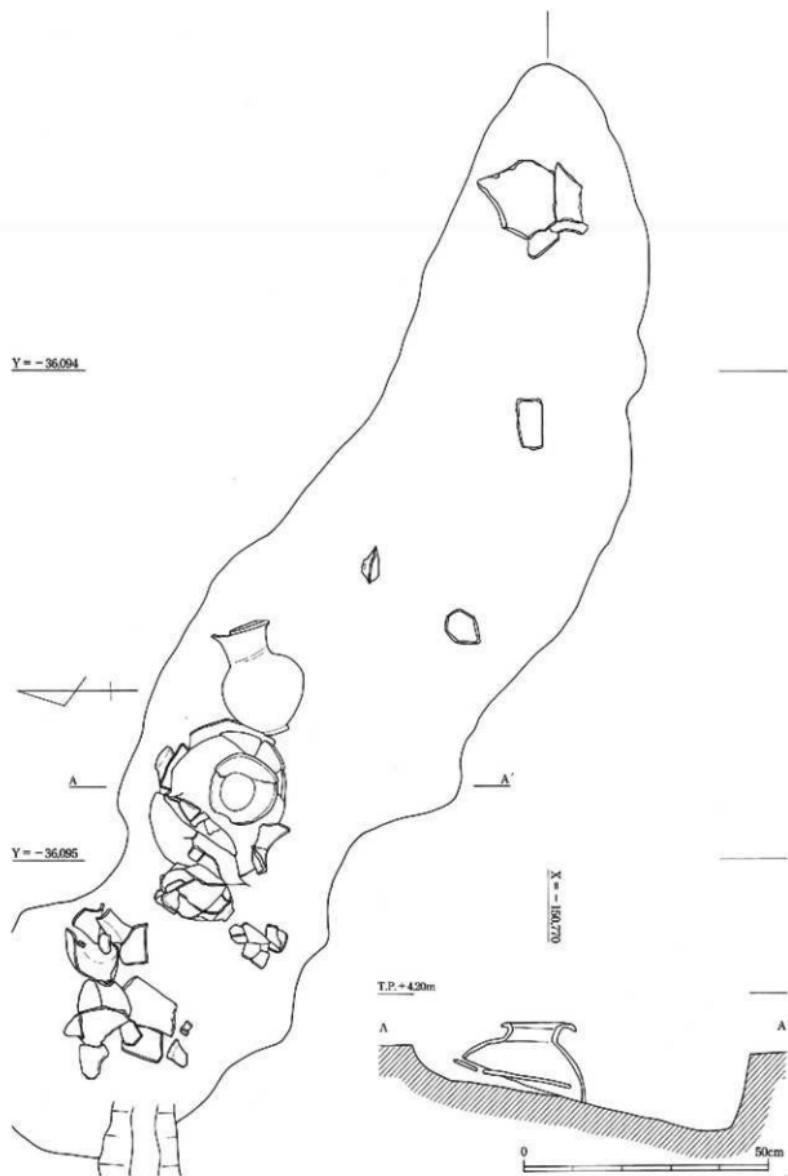


第11図 第2層下層出土遺物（2）

ラミガキが密に施されており、内面には横方向の刷毛目が残っている。49は外面は摩滅していて調整不明であるが、内面には接合痕が残っている。50の短頸壺は外面には密にヘラミガキを施し、51の長頸壺は胴部最大径が中央よりも上で、55は細頸壺である。56～62は壺で、胴高が高く胴部最大径が上方にあるもの、寸づまりで胴高が低いものまでいろいろなタイプがある。

溝—2059（第14図） 調査区北東部にある溝である。幅25～100cm、深さは10～20cm、内部には灰黒色系統の粘土が堆積しており、溝の中からも土器が出土している。器種としては、壺、高壺、器台などがあるが、全て一部が打ち削られたような形態のものが多い。

出土遺物は第17図68～74である。68は長頸壺で胴部外面にはヘラミガキの痕跡が残っており、

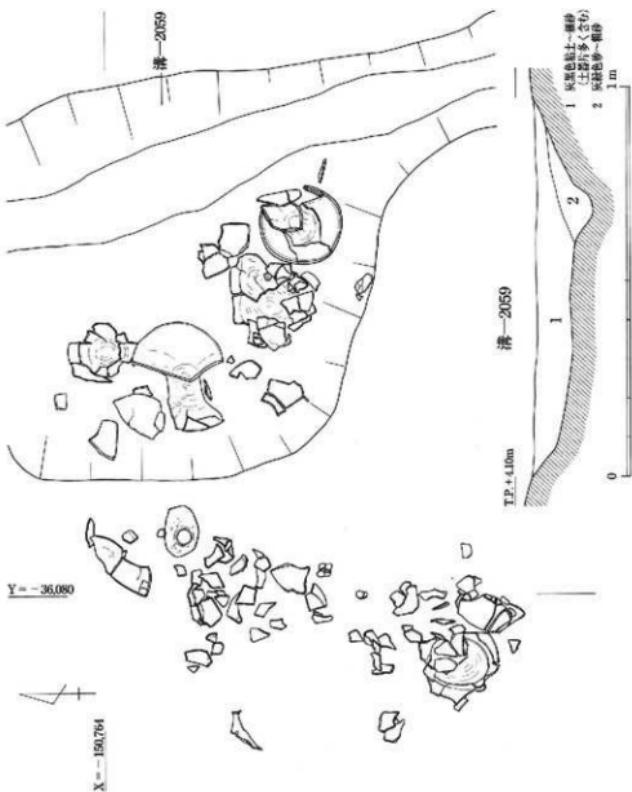


第12図 溝一2053遺物出土状況（1）

第13圖 溝—2053遺物出土狀況（2）



第14図 溝—2059遺物出土状況

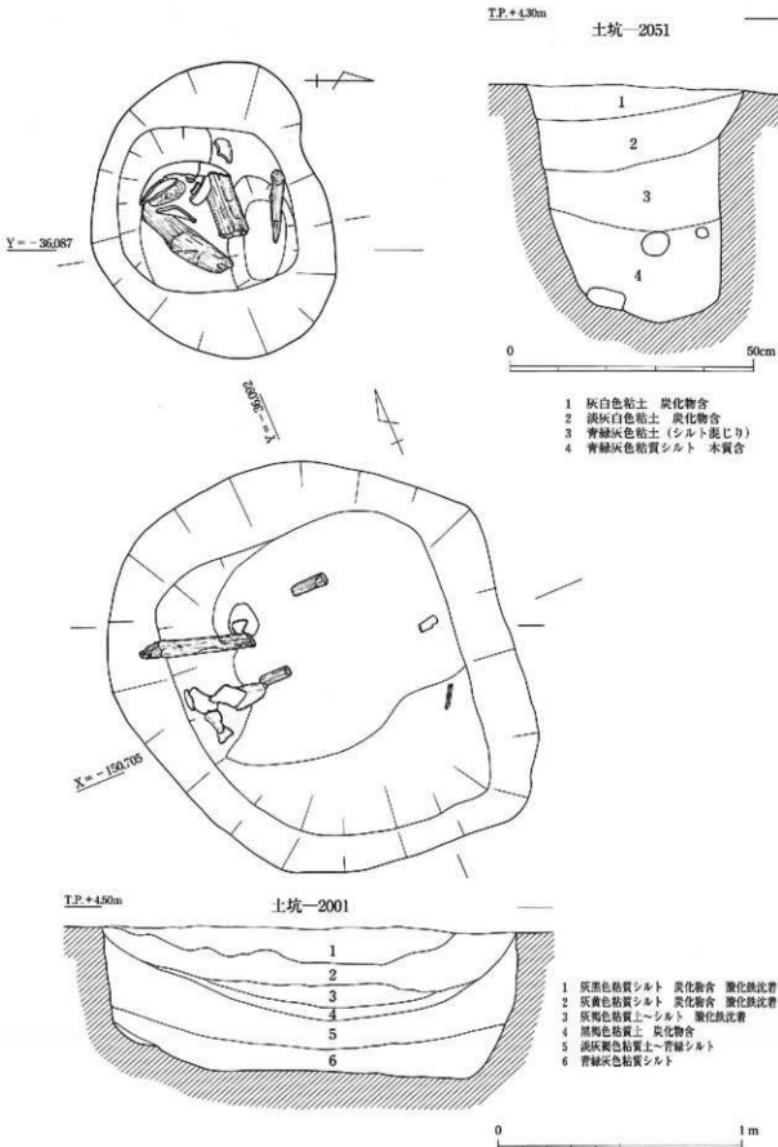


内面には刷毛目や指圧痕、接合痕が残っている。70~72は小型の甕である。73・74は器台であり、75は口縁端部拡張部と内側に波状文がめぐらされている。

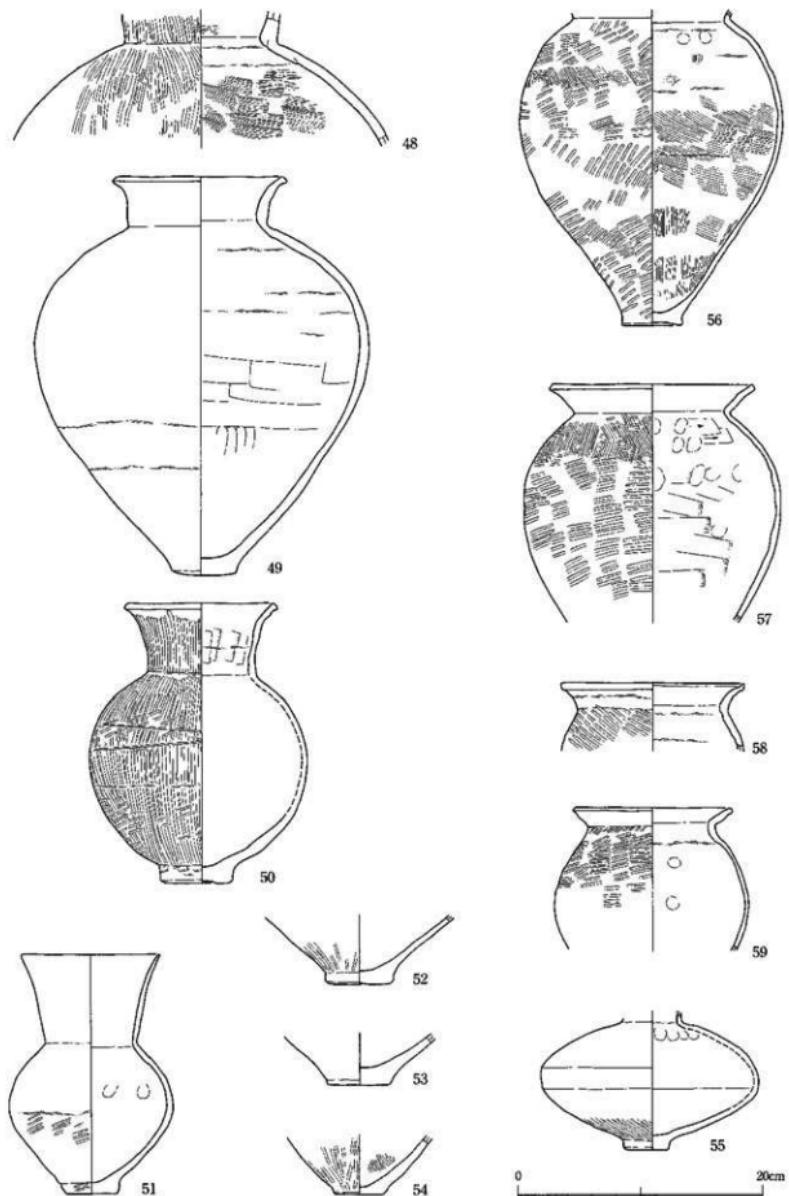
溝—2063 調査区西部にある細長い溝で、東西90cm、南北20cm、深さ15cmである。

土坑—2001（第15図） 調査区北西部にある土坑で、長さは東西、南北ともに3.4m、深さは1.2mである。土坑内部には灰～黒色のシルト層や粘質土がレンズ状に堆積している。中部からは土器だけではなく、木片も出土している。

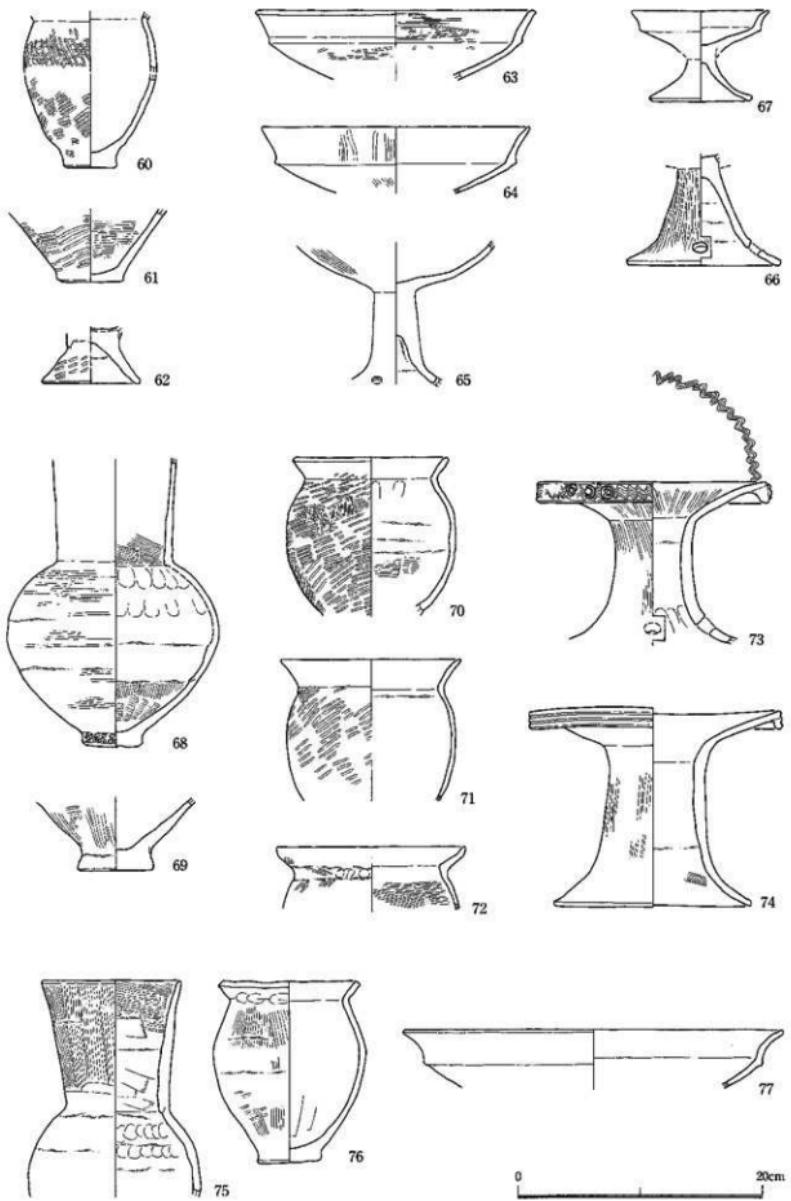
出土遺物は第18図79～83である。79は口縁部を欠くものの複合口縁甕であり、80・81はV様式



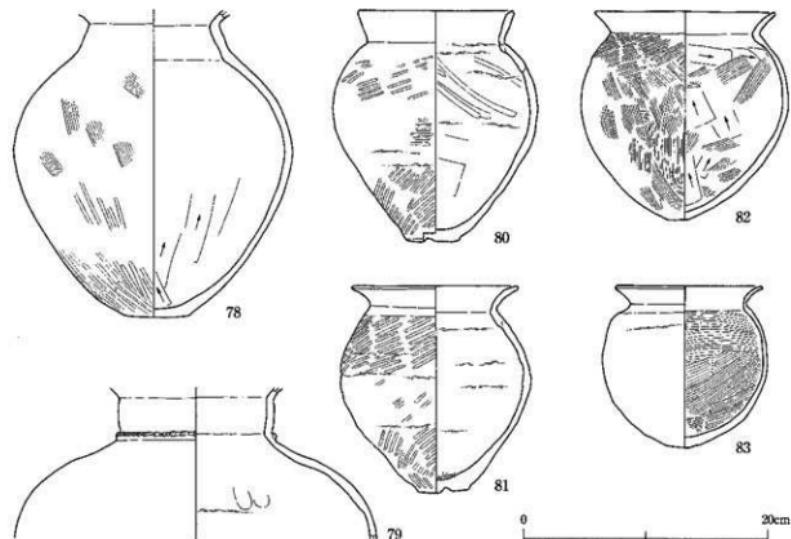
第15図 土坑—2001・2051遺物出土状況



第16図 第2面下面遺構内出土遺物（1）
溝—2053 (48~59)



第17図 第2面下面遺構内出土遺物 (2)
溝—2053 (60~67) 溝—2059 (68~74) 土坑—2062 (75~76) 土坑—2054 (77)



第18図 第2面下面遺構内出土遺物（3）
土坑—2051（78） 土坑—2001（79～83）

系統の壺で、82・83は底部がやや尖り気味になっている壺である。

土坑—2051（第15図） 調査区中央部にあるタマゴ形の土坑である。東西60cm、南北45cm、深さは55cm、灰白～青白色のシルトが堆積しており、堆積土中には炭化物が多く含まれている。底部には木片などの植物遺体が目立つ。

出土遺物は第18図78である。78は壺で口縁はかけているが、残存高は25cmを超えており、外面上部には刷毛目、下部にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリの痕跡が残っている。

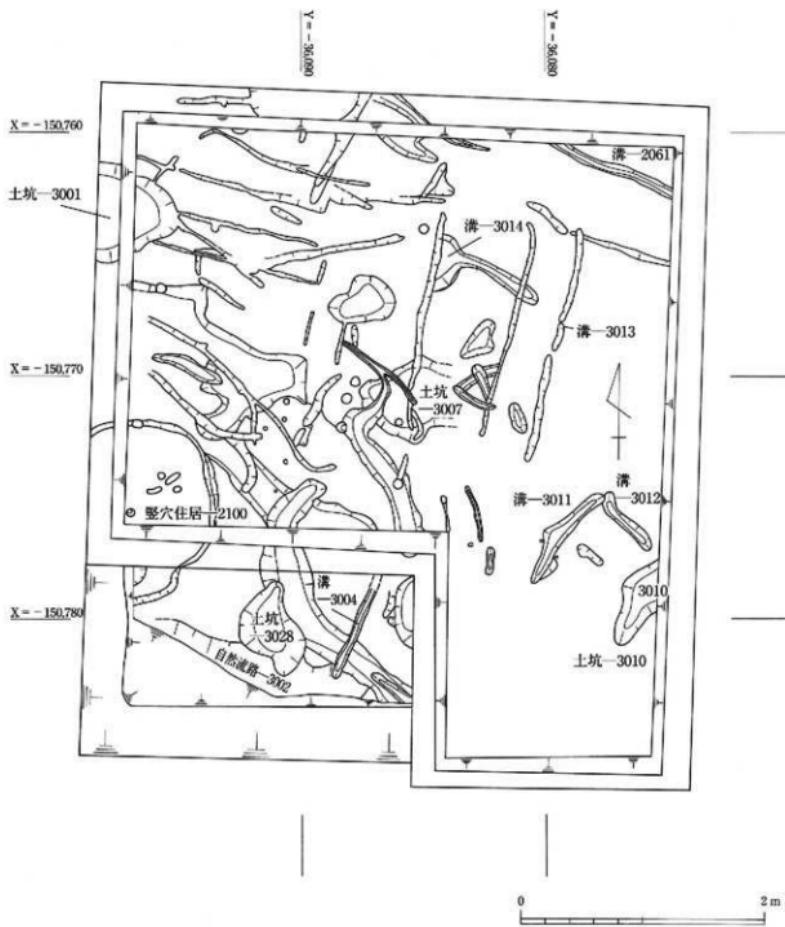
土坑—2055 2053-流路の北岸に接する土坑である。幅1.9m、深さ10cmである。内部には灰色系統の粘質土が堆積していた。

土坑—2056 流路—2053の北岸に接する土坑で、土坑—2055の東側である。幅1.6m、深さ10cmで、内部には灰色～黄色の粘土系の土が堆積しており、酸化鉄の沈着が著しい。

土坑—2067 調査区南中央で発見された細長い土坑である。東西3.5m、南北2m、深さ70cmで、土坑内部の堆積土は大きく3層に分かれ。上層はかたくしまっているが、下層はやわらかい。

出土遺物は第17図75～77である。75は長頸壺で上半部外面に縦方向の刷毛目の痕跡が、内面には横方向の刷毛目の痕跡が残っている。76は小型壺で外面に接合痕跡があり、77是有稜高杯の杯部である。

土坑—2064 流路—2053の北岸に接する土坑である。幅90cm、深さ10cmで、内部には粘土質の土が堆積しており、酸化鉄の沈着が著しい。

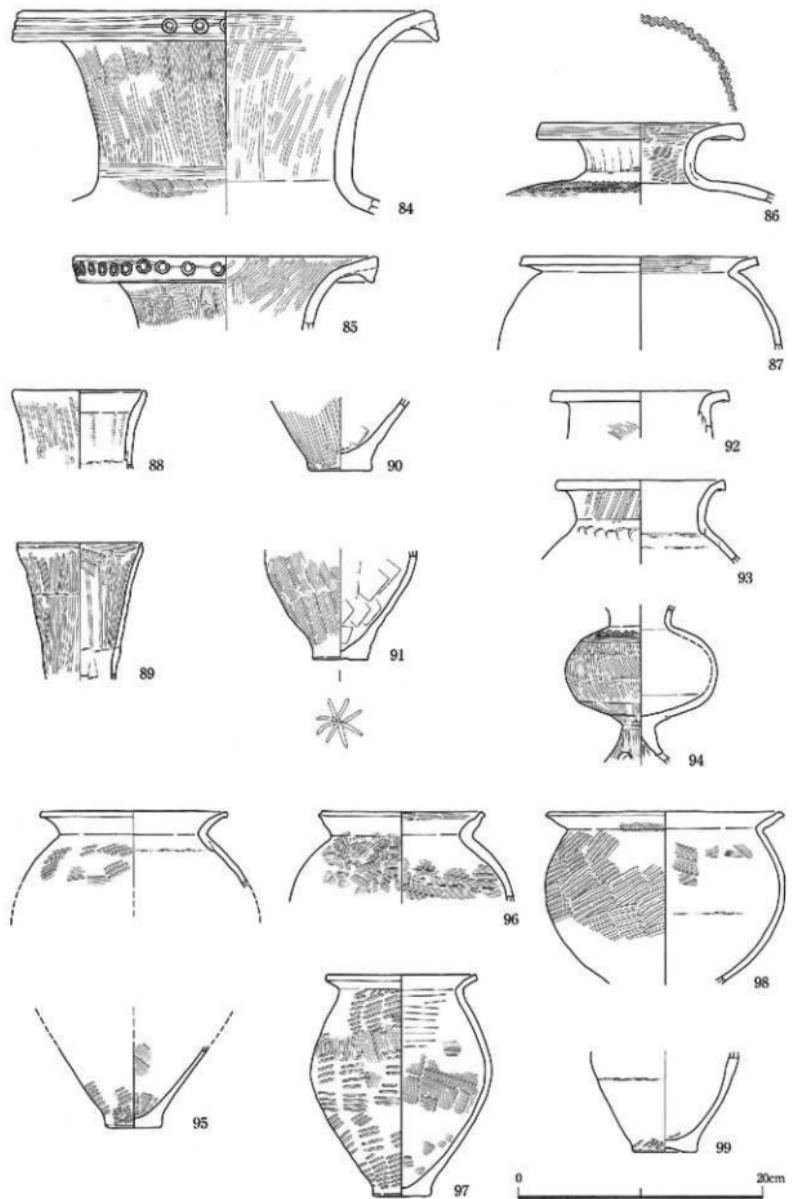


第19図 第3面遺構配置図

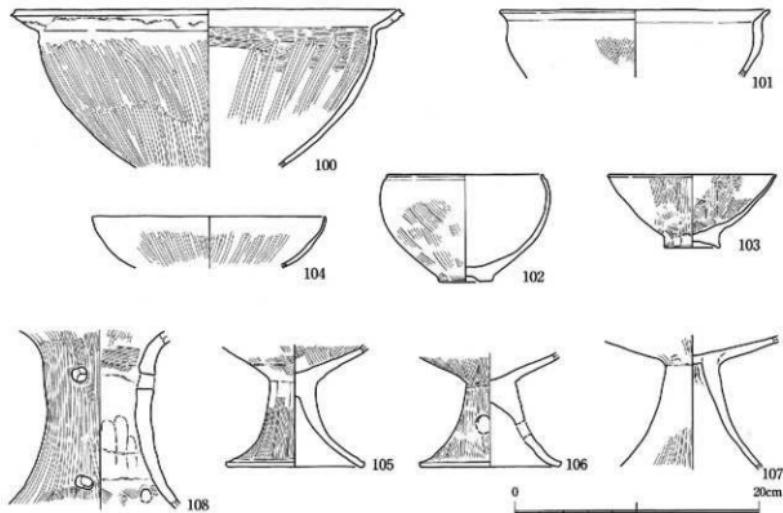
(4) 第3面

第4層上面に形成された遺構群で、基準高T.P.+3.8~4.2mである。一次調査で検出した自然流路(NR3002)の北側にある。極めて細い溝状の遺構や、不定形の落ち込みなどを主体とする遺構群である。特に調査区西側では複雑であるが、調査区南西隅で円形の竪穴式住居が見つかっている。

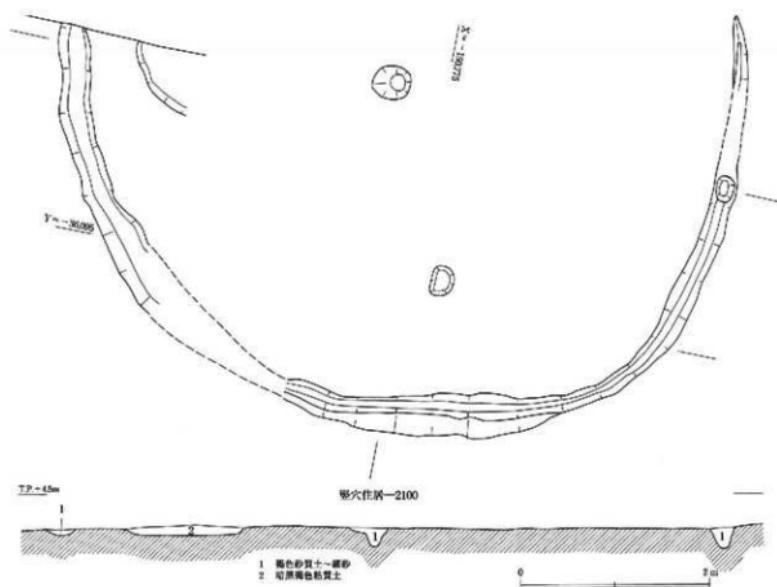
第3層出土遺物 (第20図84~第21図108) 84~94は壺類で広口壺や長頸壺等多様な形式の壺が含まれている。84・85は口縁端の拡張部に竹管分を施文している。95~99は甕で、器高が高く胴



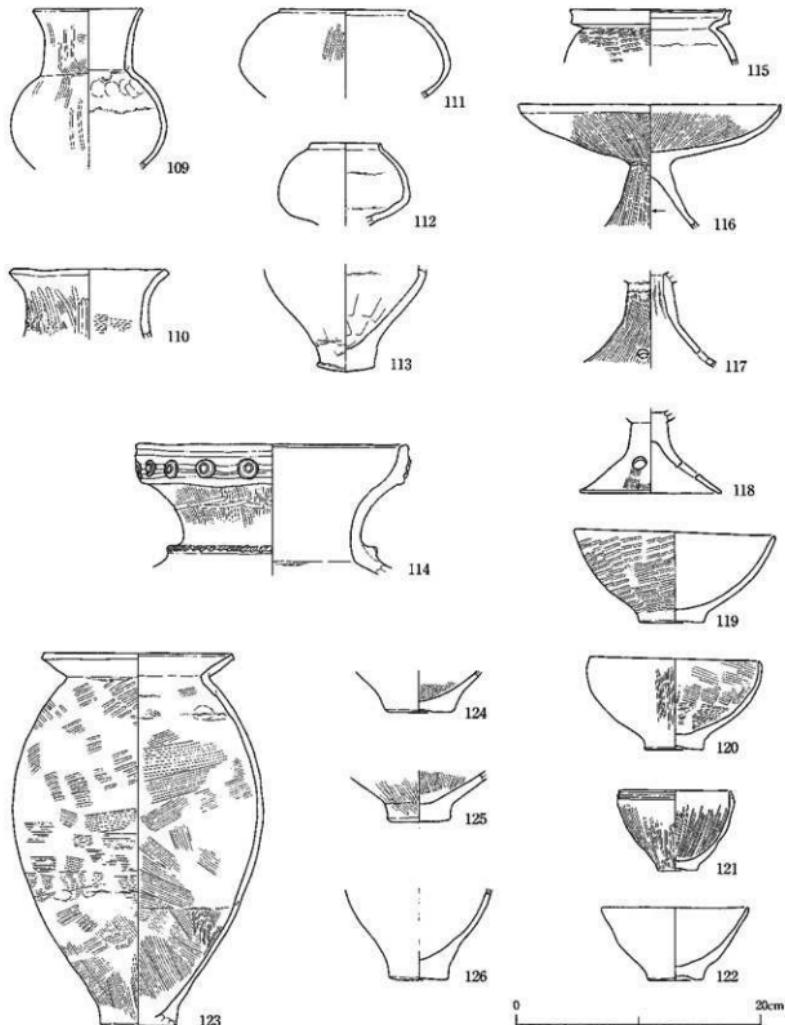
第20図 第3層出土遺物（1）



第21図 第3層出土遺物（2）

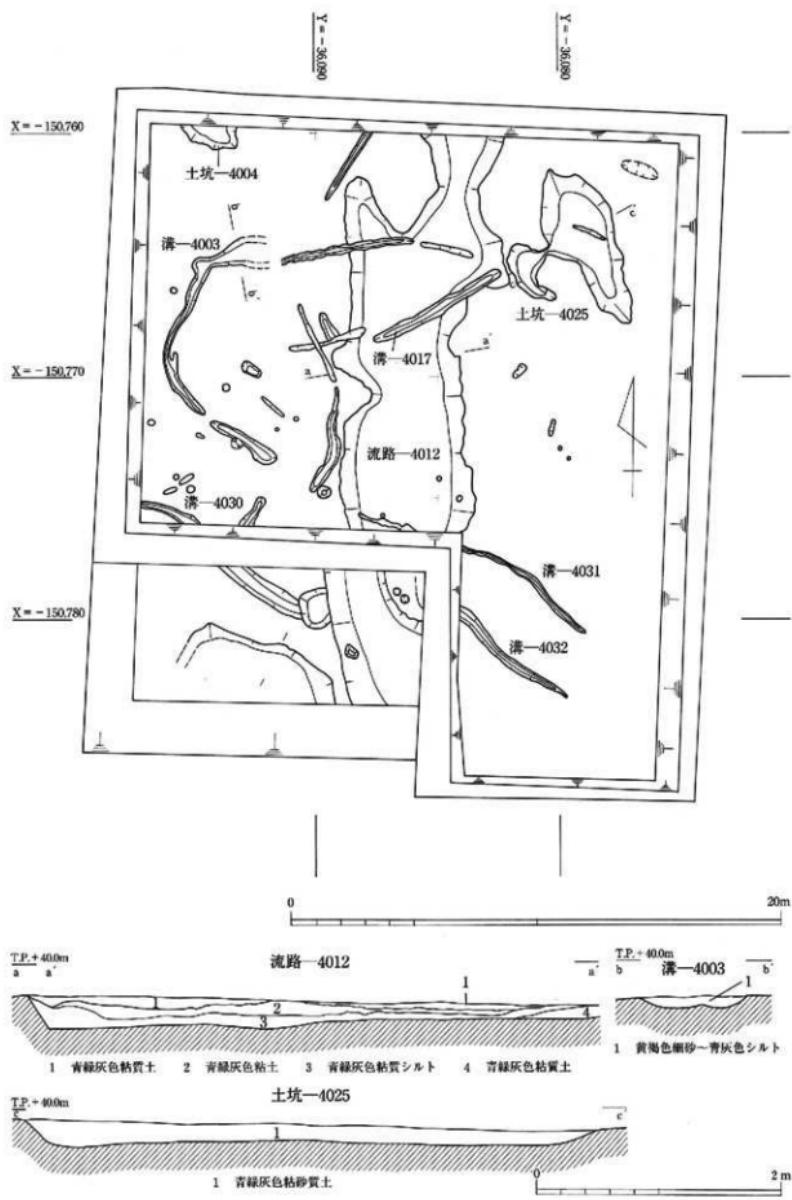


第22図 堅穴住居—2100平面図・断面図



第23図 第3面造構内出土遺物
土坑—3028 (109~118) 上坑—3003 (119~122) 整穴住居—2100 (123~126)

部最大径が中央より上にあるもの (97)、胴部が球形に近いもの (98) などいろいろな形のものがある。100は口縁がくの字形に外反する鉢で内・外面にヘラミガキの痕跡が残っている。102は胴部が球形に近い小型鉢であり、103は茶碗形の鉢である。108は両端が欠けているが器台であり、外面にはヘラケズリの痕跡が残っている。



第24図 第4面遺構配置図・主要遺構断面図

土坑—3001 調査区西北部で検出された東西に長い土坑である。東西幅約4m、深さ10~20cmある。特別な遺物は出土していない。

土坑—3028 調査区南西にある不定形土坑である。東西3m、南北4m、深さ10cmである。浅い落ち込み状の土坑であり、中からは細かな土器片がまとまって出土した。

出土遺物は第23図109~122である。114は複合口縁壺で口縁部外縁に凹線文と円形浮文を施している。111・112は無頬壺である。119~122は椀で、119は外面に右上がりの叩きを施しており、120・121はヘラミガキの痕跡が顕著である。

堅穴住居—2100 調査区南西隅近くで検出されている。調査区に半分かかるような形で確認されている。径は約7.4mと復元できる。壁溝は確認でき、床面にはピットらしい小穴や、焼土のつまた土坑などが検出されている。住居に伴うはっきりした遺物がないので、具体的な時期は不明である。しかしながら、形態からして弥生時代後期よりは遡る時期の遺構と推測される。

出土遺物は第23図123~126である。123は長胴の甕で外面は刷毛目調整の後に右上がりの叩き目を施しており、内面にも刷毛目を施している。124~126は壺の底部である。

小溝群 北北東~南南西あるいは西北西から東南東方向にのびる小溝群が検出されている。この小溝は幅も深さも数cm~10cmくらいの深い細いもので、調査区全体で十数本検出されている。

自然流路—3002 調査区の南端を画する流路であり、一次調査で検出されたNR3002の続き部分である。南東から北西方向に流れる流路で、幅5~8m、弥生時代後期の遺構面を切り裂くように流れている。この流路の埋没後にできるのが第2面下面の遺構群である。

(5) 第4面

灰色系統のシルト層の上に形成された遺構群で、基準高T.P.+3.6~3.8mである。浅い流路や不定形の落ち込みなどが主体で、はっきりした遺構はない。遺物は何も出土していないので詳しい時期はわからないものの、弥生時代中期以前の面と推測される。

流路—4012 調査の中央を南北方向に流れる流路状の落ち込みである。幅2~6m、深さ30cmで、青緑灰色系統のシルト~粘土層が主体である。ここからも特別な遺物は出土していない。

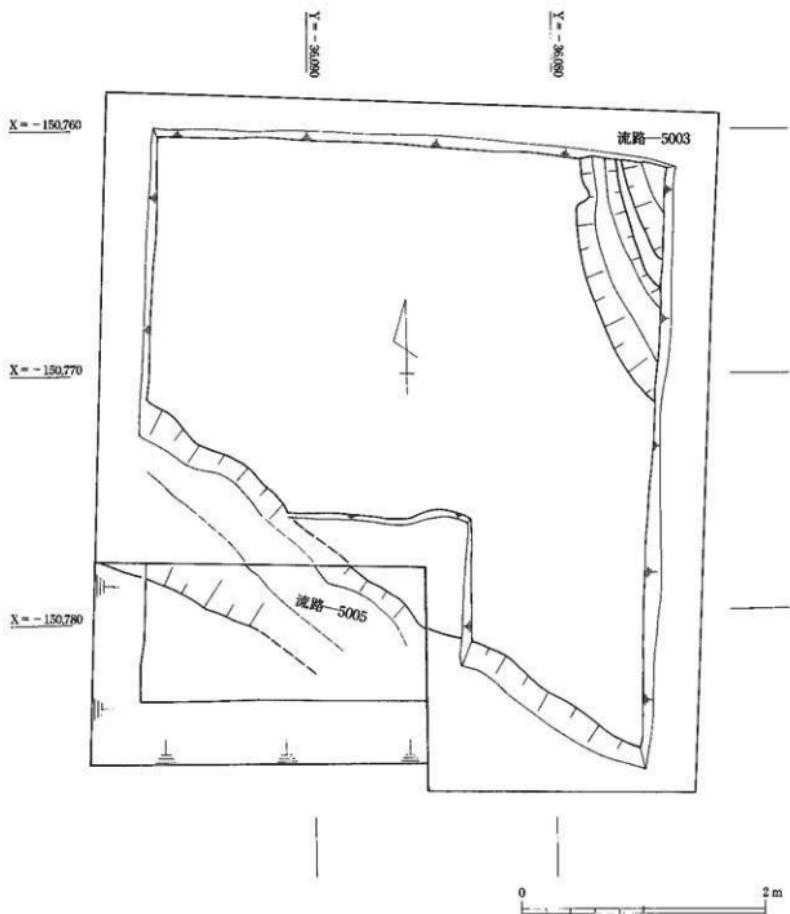
溝—4003 調査区西部に所在する溝である。途中曲がりながら10m分くらいが残存している。幅50cm、深さ10~20cmで、青色系統のシルトが堆積している。

溝—4030 調査区南部にある溝で、西北から南東方向に振っている。幅80cm、深さ10~15cm、埋土は灰黄色細砂が主体である。

土坑—4025 調査区東北隅にある不定形の土坑である。幅は一番大きいところで東西4.5m、南北7m、深さ20cmで、埋土は青緑灰色粘砂質土である。

(6) 第5面

オリーブ色系統の粘土層の上に形成された遺構群である。基準高はT.P.+3.6mを前後する。これより上で検出された面に比べると平坦である。覆土からも遺物は発見されていないので時期などはわからないが、調査区の南西端と北東端とで自然流路が発見されている。



第25図 第5面遺構配置図

流路-5003 調査区東北隅で発見された流路である。北から南へ流れしており、検出幅4m以上、深さは1mを超える。堆積土は砂と粘土やシルトとの互層で、砂の粒子は比較的細かい方である。

流路内部からはもちろん周辺からも遺物は出土しておらず、時期などについては全く不明である。

流路-5005 調査区南縁を西北から東南へと斜め方向に横切っている流路である。幅は5~6mで、深さは1m以上、堆積土は砂と粘土やシルトとの互層である。堆積層は植物遺体なども含んでおり、砂の粒子は比較的細かい。遺物は全く出土しておらず、この流路の所属する時期などについては不明である。

第4章 まとめ

八尾北高校校舎建設に伴う萱振遺跡の発掘調査では、弥生時代後期から中世に至るさまざまな遺構や遺物を検出した。1次調査の調査区の南方にあたり、弥生時代～中世までの遺構群を検出したが、いずれも集落縁辺部の様相を示すものばかりである。萱振1号墳に平行する時期の遺構は明確ではなかった。以下、今回の調査区の調査成果を時期別に見てみよう。

弥生時代中期以前

第4面で検出している溝などの遺構群が弥生時代中期以前の所産と思われる。一番目立つものとしては流路一4012がある。調査区中央を南北方向に貫くように流れているが、内部から遺物は何も出土しておらず、単なる自然の流れであった可能性がある。その他にも小さな落ち込み状の遺構や溝状の遺構らしい痕跡はいくつか検出されてはいるが、いずれも遺物は伴っていない。またこれらの存立する基盤面はシルトなどを主体とする柔らかい脆弱な面であり、調査区の周辺でもこの時期の明確な遺構群は検出されていない。今回の調査地点においても、この時期まで遡って、継続的な生活が行われていたことを示すとは考えにくい。主たる生活領域からははずれているものと推測される。

弥生時代後期

今回の調査区の中では一番中心となる時期で、第3面で検出した遺構群がこの時期に相当しており、弥生時代後期でも後半に属する遺構が多い。一番はっきりした遺構は、調査区西側で検出した竪穴住居である。1次調査の折りには竪穴住居は発見しておらず、今回も1基だけの発見に留まった。円形の竪穴住居であり、これのみが後期前半にまで遡る可能性が大きい。

1次調査では数多くの掘立柱建物跡や井戸、溝などの遺構を検出しているものの、今回の調査区では、竪穴住居以外には不定形土坑や小さな溝ばかりで、様相がかなり異なっている。今回調査した遺構群は氾濫した自然流路NR3002Bの北側にあたり、遺構面の標高も南側よりも若干低くなっている。自然流路NR3002Bは事実上、弥生後期集落の北側の境界であり、今回の遺構群は弥生時代後期集落の縁辺部の様相を示すものであろう。

古墳時代初頭

第2面下面の遺構群がこの時期に該当する。L字形の溝（溝一2053）を主体とし、溝や土坑などが検出されている以外に、遺構を伴わない形で包含層から出土した土器も多い。これら土器は高杯が多く、しかも一部破碎されたようなものがある。用途ははっきりしないが、何か集落の縁辺で行われた祭祀行為の痕跡とも思われる。また溝一2053を方形周溝墓の一部であるとすると、これら土器群は周溝墓に関連する儀礼行為の痕跡であった可能性も考慮しなければならない。

奈良時代

1次調査の折りには多数の掘立柱建物跡、井戸、溝などを検出しているが、今回は奈良時代相当の遺構面は確認できなかった。ただ遺物として包含層から墨書き面土器が1点出土しているのみである。

中世

第2面上面の遺構群が相当する。この時期も遺構は散漫であり、溝が主体である。2003—溝のように南北方向のものと、斜め方向にのびる溝とがある。第1遺構面には先行するものの、遺物から中世の遺構群と思われる。遺物から14世紀頃と思われる。

近世

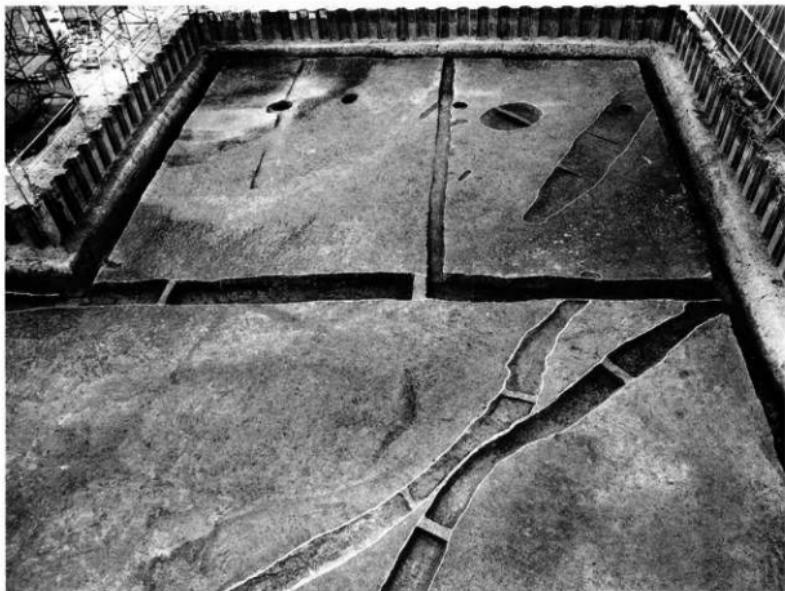
第1面の遺構がこの時期に相当する。流路と小溝群が主体で、建物の痕跡などは検出していない。小溝群は条里地割りの方向と合致しており、耕作に伴う痕跡と推測される。

図 版

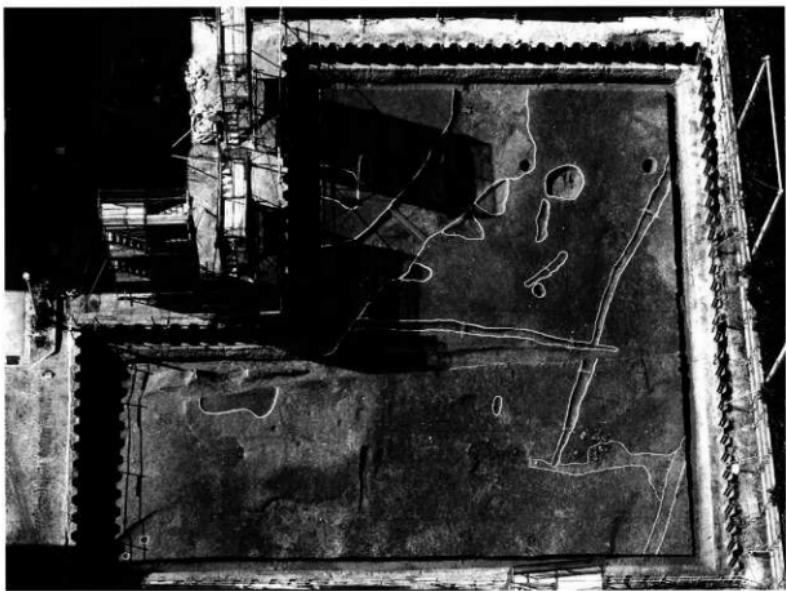




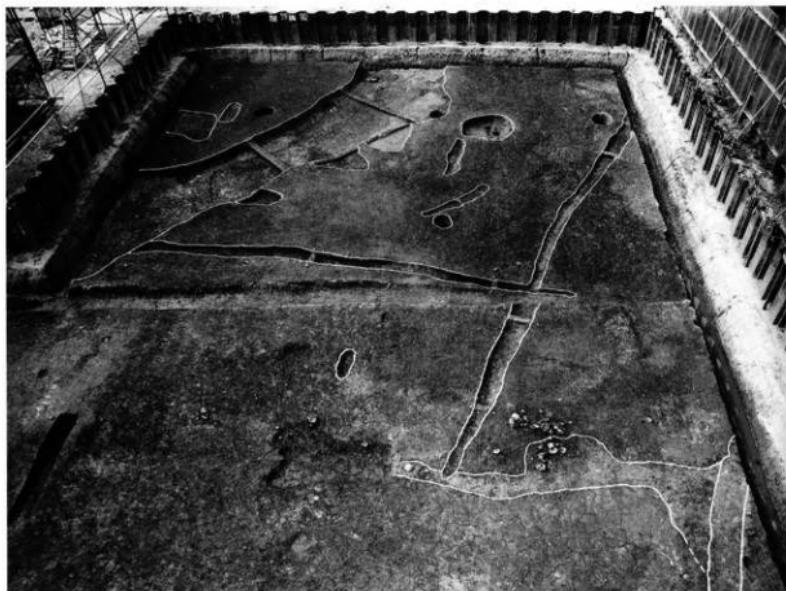
第1面全景（東から）



第2面上面全景（東から）



第2面下面垂直写真



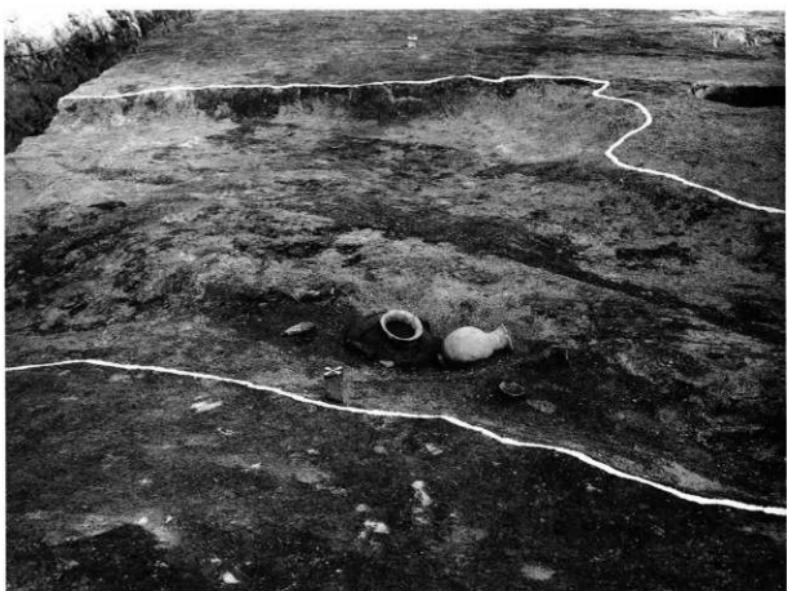
第2面下面全景（東から）



第2面下面西部（東から）



第2面下面南西部（南から）



第2面下面溝—2053検出状況（南から）



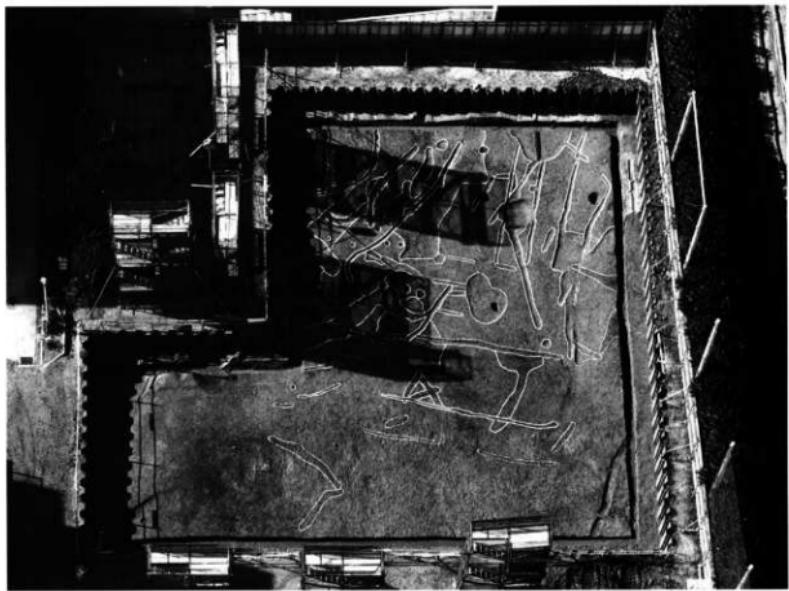
第2面下面土坑—2051検出状況（南から）



第2面下面土坑2001半掘状況（南から）



第2面下面土坑2001完掘状況（南から）



第3面垂直写真



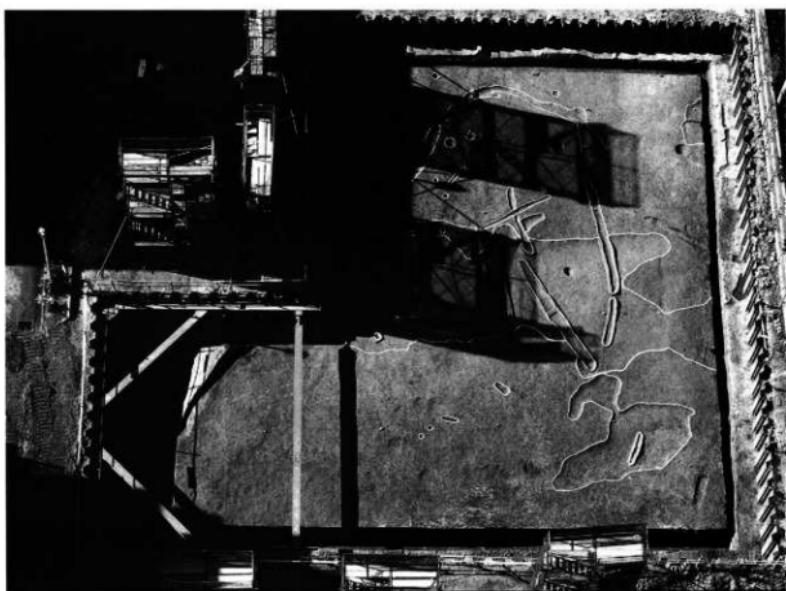
第3面西部（南から）



第3面竪穴住居—2100検出状況



第3面南西部（南西から）



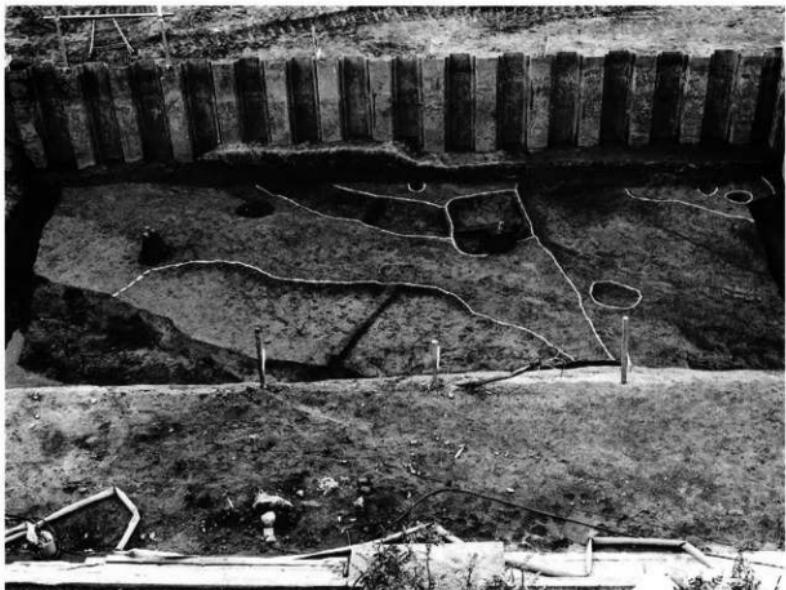
第4面垂直写真



第4面全景（南から）



第4面全景（東から）



第4面南西部（南から）



2



7



20



15



21



32



29



33

流路—1017 (2) 第2層上層 (7) 第2層下層 (15·20·21·29·32·33)



26



50



43



44



49



55



46



51



57



54



59



56



60



62



67



66



78



70



71



68

溝—2053 (62·66·67) 土坑—2051 (78) 溝—2059 (68·70·71)



73



74



75



76



77



78

溝—2059 (73·74) 土坑—2067 (75·76) 土坑—2001 (80·81)



83



82



84



90



95



97

土坑—2001 (82・83) 第3層 (84・90・95・97)



102



109



106



116



119



123



120

第3層 (102・106) 土坑—3028 (109・116・119・120) 壓穴住居—2100 (123)

報告書抄録

ふりがな	かやふりいせき
書名	菅振遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2005-1
編著者名	横田 明
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2005年12月28日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かやふりいせき 菅振遺跡	やおしかやふり 八尾市菅振 7丁目地内	27212	65	36	140	平成15年 8月20日- 5平成16年 163月15日	680	府立八尾北 高校校舎 建設事業
				6				
				13				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項
菅振遺跡	集落	弥生時代	流路、溝、土坑、 円形堅穴住居	土器、木器 石器	
		古墳時代	流路、溝、土坑 井戸	土器	
	水田 畑	中世	耕作溝	瓦器、	

大阪府埋蔵文化財調査報告2005-1
萱振遺跡Ⅱ
2005年12月28日発行

編集・発行 大阪府教育委員会
TEL 540-8571
大阪市中央区大手前2丁目

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
TEL 06-6976-8761
大阪市東成区深江南2-6-8

